

ハトムギ新品種「はとじろう」(はとむぎ農林3号)の育成経過と主要特性

加藤 晶子・石田 正彦・千葉 一美

(東北農業試験場)

Breeding Process and Characteristics of a New Job's Tear Cultivar "Hatojirou"

Masako KATO, Masahiko ISHIDA and Ichimi CHIBA

(Tohoku National Agricultural Experiment Station)

1 はじめに

東北地方はハトムギの主要栽培地帯であり、主として「中里在来」を水田地帯で栽培している。しかし、「中里在来」は中生種であるため、東北地方北部では低温の影響を受けやすく、生産が不安定であった。また、「中里在来」の成熟期は10月上旬であり、水稻の収穫作業と競合する期間が長い。さらに、草丈が高く、着粒層が広い機械収穫に適さなかった。このため、「中里在来」の欠点を改良した早生、短稈で、機械化適性の高い新品種の育成が要望されていた。

「はとじろう」は平成7年(1995年)8月にハトムギ「農林3号」として農林登録された。「はとじろう」は成熟期が「中里在来」より1週間~10日程度早い。また、短稈で着粒層が狭いため機械化適応性が高く、栽培管理が容易である。このため、東北地方中、北部に適した新品種として期待される。そこで、本品種の育成経過と主要特性について報告する。

2 育成経過

「はとじろう」は早生・短稈・多収品種の育成を目標として、昭和60年(1985年)、東北農業試験場栽培第一部作物第2研究室(秋田県大曲市・現水田利用部)において「黒石在来」の系統選抜を開始し、昭和62年(1987年)以降、作物開発部資源作物育種研究室(盛岡市)で選抜、特性の調査等を継続してきたものである。

平成3年度(1991年)より「盛系2号」の系統名で生産力を検定すると共に秋田県農業試験場、宮城県立農業センターで系統比較試験を行い、平成5年度(1993年)から「東北2号」の地方番号を付し、青森県農業試験場等で適応性の検討を行ってきた。平成6年(1994年)における世代はP10である。

原品種の「黒石在来」は青森県黒石市の在来種である。早生、短稈、多茎であるが、稈径が細く、鞘状苞の下垂が著しい。草姿が不良で栽培管理、機械収穫等に難点があり、低収であるため現在ではほとんど栽培されていない。

3 特性の概要

育成地における「はとじろう」の特性を表1に示す。「はとじろう」の出穂期、成熟期は「中里在来」よりかな

り早く早に属し、「黒石在来」と同程度である。成熟期における草丈は「中里在来」よりもかなり短く「黒石在来」並の短であり、「中里在来」より30cm以上短い。茎数は「中里在来」よりも多いが「黒石在来」と比較して著しく少ない。稈径は「黒石在来」と同程度で「中里在来」よりも細い。着粒層は「中里在来」より狭く、鞘状苞数が少ない。葉身の大きさは「中里在来」より小さく、葉身色は緑であり、葉鞘色は淡黄緑、柱頭色は白である。

穀実収量は「中里在来」より劣るが、「黒石在来」より多い。「はとじろう」は密植することにより単位面積当たりの茎数の増加が著しく、穀実収量の増加も著しい。穀実は長楕円形で、黒褐色であり、「中里在来」より硬い。リットル重は「中里在来」より軽い、百粒重は重く、粒が大きい。子実歩留は「黒石在来」よりやや高いが「中里在来」より低い。タンパク質含有率、脂肪含有率、灰分はともに「中里在来」より高い。

耐倒伏性は「中里在来」より強く、葉枯病抵抗性は「中里在来」、「黒石在来」並の中である。脱粒性は「中里在来」と同程度の易である。

「はとじろう」の外観品質は「中里在来」と同等であり、お茶としての加工適性も同等である。しかし、精白した場

表1 育成地における「はとじろう」の主要特性

品種名		はとじろう	中里在来 (対照)	黒石在来 (比較)
形質				
出穂期	(月日)	7.14	7.29	7.17
成熟期	(月日)	9.21	10. 2	9.16
草丈	(cm)	96	134	102
茎数	(本/株)	7.4	5.5	9.9
稈径	(mm)	6.2	8.9	6.0
着粒層	(cm)	51	67	61
鞘状苞数	(個/株)	85	113	106
穀実収量	(kg/a)	30.0	36.2	29.0
対照品種比	(%)	83	100	79
リットル重	(g)	497	531	545
百粒重	(g)	13.3	12.2	10.1
子実歩留	(%)	57.0	60.0	55.9
穀実	大 小 形 色 硬 さ	大小 長楕円 黒褐 硬	中大 楕円 淡褐 中	小 長楕円 黒褐 硬
	耐倒伏性 脱粒性 葉枯病発生程度	強 易 微	中の弱 易 微	強 易 微

注. 平成3~6年(黒石在来は平成4, 6年)の平均値

合、一般流通品である「はとむすめ」に比べて白さがやや劣る。

4 普及見込み地帯における特性概要

青森県、秋田県における「はとじろう」は出穂期、成熟期がともに「中里在来」より早い。成熟期における草丈は「中里在来」よりもかなり短く、着粒層が狭い。穀実収量

は「中里在来」と同等あるいは多収である。百粒重は「中里在来」より重く大粒であるが、リットル重は軽い。

以上のことから、「はとじろう」は水田地帯では水稻の収穫作業と競合する期間が短く、低温の影響を受けやすい東北北部でも安定した栽培ができる。また、短稈で着粒層が狭いためコンバイン収穫等機械栽培適応性が高い。

表2 普及見込み地帯における「はとじろう」の生育及び収量調査成績

試験場所	品 種 名	出穂期 (月. 日)	成熟期 (月. 日)	草 丈 (cm)	着粒層 (cm)	穀実収量 (kg/a)	対照比 (%)	百粒重 (g)	リットル重 (g)
青森県 農業試験場	はとじろう	7.28	9.24	168	75	36.0	108	12.7	460
	中里在来	8. 3	10. 7	187	82	33.2	100	11.5	471
秋田県 農業試験場	はとじろう	7.26	9.24	138	54	40.7	101	13.0	479
	中里在来	8. 5	10. 2	164	56	40.3	100	12.3	519

注. 青森県農業試験場：平成4～6年の平均値。

秋田県農業試験場：平成3～6年の平均値。

5 ま と め

「はとじろう」の主要特性は次のとおりである。

- (1) 出穂期、成熟期は早に属し、「中里在来」より早い。
- (2) 成熟期における草丈は短に属し、「中里在来」よりかなり短い。
- (3) 穀実の収量は「中里在来」と同等あるいはやや多収である。

- (4) 百粒重は「中里在来」より重く、粒が大きい。
- (5) 着粒層は「中里在来」より狭い。
- (6) 茶の加工適性は「中里在来」と同等である。
- (7) 脱粒性は「中里在来」並の易である。
- (8) 葉枯病に対する抵抗性は「中里在来」並の中である。
- (9) 耐倒伏性は「中里在来」より強く、強である。
- (10) 適地は東北地方の中、北部である。